

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

■ 翻訳批評

山岡洋一

一 深く失望 — ケインズ著間宮陽介訳『雇用，利子および貨幣の一般理論（上）』

ケインズの『一般理論』に待望の新訳があらわれたと喜んだが、期待が大きかっただけに、深く失望することになった。塩野谷九十九訳と比較すればともかく、塩野谷祐一訳と比較した場合には、少なくとも翻訳のスタイルでは進歩がないし、翻訳の質という点ではむしろ後退していると思えたからだ。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

(@は半角文字に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

深く失望 —ケインズ著間宮陽介訳『雇用、利子および貨幣の一般理論（上）』

3年前の2005年に『星の王子さま』の翻訳ブームが起こった。この年の1月に日本での著作権保護期間が切れて、岩波書店の内藤濯訳の独占権がなくなったからだ。その年に10点近くの新訳があらわれ、翌年にもさらに10点近くが出版されている。読者にとって、選択の幅が一気に広がったのだから、ありがたいことだ。

著作権は複雑怪奇だが、日本では基本的に死後50年までが保護期間になっている。英米仏などの第2次世界大戦の連合国で出版された書物ではこれに、いわゆる戦時加算の約11年半が加わる。ケインズは1946年4月になくなっているのに、2007年終わりには日本での著作権保護期間が切れているはずである。もちろん、ケインズの著作は『星の王子さま』とは違って、数百万部の大ベストセラーになる本ではないし、翻訳も容易ではないので、新訳がつぎつぎに登場する状況になるはずはない。それでも、『一般理論』で塩野谷親子の独占権がなくなるので、新訳があらわれるのは予想されたことであった。『一般理論』は原著が1936年に発行されてからわずか5年後の1941年に、東洋経済新報社から塩野谷九十九訳が出版され、1983年に同じ東洋経済新報社から、『ケインズ全集第7巻』として、息子の塩野谷祐一の訳が出版されている（1995年にソフト・カバーの普及版がでていた）。70年近くにわたった塩野谷親子の独占権がようやく切れて、新しい訳がでてくる状況になったのだ。

それに、岩波文庫で間宮陽介訳が出版されることは、前から分かっていた。準備は整っていて、著作権の保護期間が切れればすぐに出版されると、2006年5月に発行された伊東光晴著『現代に生きるケインズ』（岩波新書）に書かれていたからだ。だから、2008年1月について上巻が出版されたとき、待望の新訳があらわれたと喜んだ読者が多かったのではないと思う（下巻は2008年3月に出版予定）。

間宮陽介訳が出版されたのは1月半ばだが、意外なことに入手が難しく、実際に買ったのは1月末であった。すぐに読みはじめた。だが、期待が大きすぎたという面もあるだろうが、深く失望することに

なった。塩野谷九十九訳と比較すればともかく、塩野谷祐一訳と比較した場合には、少なくとも翻訳のスタイルでは進歩がないし、翻訳の質という点ではむしろ後退していると思えたからだ。いくつか、典型例をあげて説明していこう。

第一篇第一章冒頭で失望

間宮訳には、第一篇第一章の第1センテンスですっかり失望する結果になった。こう書かれていたからだ（なお、下線は引用者による）。

例1

私は本書を『雇用、利子および貨幣の一般理論』と名づけた。一般という接頭辞に力点を置いてである。（間宮陽介訳『雇用、利子および貨幣の一般理論』岩波文庫5ページ）¹

このように、間宮は原文の prefix を「接頭辞」と訳している。なぜなのか。「一般」が接頭辞だからだろうか。もちろん、そうではない。「接頭辞」は文法用語だ。「不十分」の「不」や「ご親切」の「ご」などが接頭辞であって、「一般」は接頭辞ではない。ではなぜ、「一般という接頭辞」と訳したのか。原文に、the prefix general と書かれており、prefix という語を英和辞典で引くと、たいていは「接頭辞」という訳語が真っ先にでてくるからだ。

間宮陽介は「訳者序文」で、この翻訳は「逐語訳」であり、ケインズの原文を「できるだけ平明な日本語」に換えることに苦心したと述べている。だが逐語訳は通常、翻訳調、学者訳などともいわれ、「平明な日本語」とは矛盾するとみられている。この「接頭辞」という訳語をみると、間宮のいう「逐語訳」は、やはり翻訳調のことなのかと思わざるをえない²。塩野谷九十九訳、それを受け継いだ塩野

¹ 例1原文

I have called this book the *General Theory of Employment, Interest and Money*, placing emphasis on the prefix general. (John Maynard Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Prometheus Books, p. 3)

² 「接頭辞」と書かれていようが、ケインズの経済理論を理解するうえで妨げにはならないという意見もあろう。だが、同じ姿勢はたとえば、increaseという語の訳し方にもあらわれる。この語は

谷祐一訳と変わらない翻訳スタイルを間宮は採用している。後に触れるように、塩野谷訳の場合には、これが時代の要請にあっていたとみられる。だが、21世紀の新訳に相応しいスタイルだとは思えない。

翻訳のスタイルが変わらないのだから、翻訳の質を判断する際には、2つの点に重点をおくしかない。第1に、既訳の間違いを訂正できているか、第2に、既訳と比較して、新しい解釈が示されているかである。そこで、既訳と違う点はどこなのかを中心に、読み進めていくことにした。比較したのは主に『ケインズ全集第7巻』の塩野谷祐一訳であり、必要に応じて塩野谷九十九訳第3版（1960年）を参照した。既訳との違いは意外に少なく、そのなかで、この2点で既訳より前進したと思える箇所は少ないようだった。逆に、後退したと思える箇所の方が多かった。

並列の解釈の違い

まずは比較的簡単な問題、andの処理を取り上げる。第六章付論につきの部分がある。

例2

間宮訳

……しかし、余剰設備が存在するとしたら、そのときには、使用費用はさらに利子率と、そして余剰が損耗その他によって底をつくとき期待される時点が来るまでの期間にわたる当期補足費用（つまり再評価された補足費用）にも依存するだろう。（同上99～100ページ）³

塩野谷祐一訳

……しかし、もし過剰設備があれば、その場合には使用者費用は、過剰部分が消耗などによって吸収されてしまうと予想されるまでの期間における利子率および当座的（すなわち再評価された）補足費用にも依存するであろう。（『ケインズ全集第7巻』71ページ）

間宮訳と塩野谷祐一訳では「利子率」の部分の解釈が違っている。一読すると、間宮訳ではこの部分の理解が難しく、塩野谷祐一訳の方が理解しやすいように思うが、その点は無視して、純粹に英文解釈

数量の増加にも、率の上昇にも使われるが、英和辞典にはなぜか、「増加、増大」といった訳語しかでていない。そこで、数量の場合も率の場合もかまわず「増大」と訳すのが逐語訳である。この場合には、経済理論の理解を妨げることになりかねない。たとえば、間宮訳の60ページを参照。

³ 例2原文

.... If, however, there is redundant equipment, then the user cost will also depend on the rate of interest and the current (i.e. re-estimated) supplementary cost over the period of time before the redundancy is expected to be absorbed through wastage, etc. (Op. cit., p. 70)

という点から考えてみよう。

原文は、A and B over Cという形になっている。このandが何と何を並列しているのかが問題である。英文法ではandは同一の形のもを結ぶのが原則なので、(A and B) over Cが原則だ。それでは意味上、矛盾がある場合には、例外としてA and (B over C)と考える。塩野谷祐一は原則を採用し、間宮訳は例外を採用したことになる。どちらが正しいかは通常、原文の「形」だけでは分からない。原文の「意味」から判断するしかない。だが、これを言い換えた表現があれば、「形」から判断できる場合もある。

つぎの段落にも同様の表現があり、やはり解釈が違っている。そのつぎの段落では、表現が少し違っている。塩野谷祐一訳と間宮訳のどちらが正しいかを、原文の「形」だけから判断できるようになっている。段落の全体をみてみよう。

例3

間宮訳

同様にして、船舶、工場、機械などの使用費用は、これらの設備が過剰供給の状態にあるときには、利子率で割り引いたその推定更新費用と余剰がなくなると見込まれる期日にいたるまでの当期補足費用とである。（同上100ページ）⁴

塩野谷祐一訳

同じように、船舶や工場や機械の使用者費用は、これらの設備が過剰供給の状態にある場合には、過剰部分が吸収されてしまう将来時点までの利子費用および当座的補足費用の百分率によって割り引かれたその推定取替原価である。（同上71ページ）

ここでもandの並列について、間宮訳と塩野谷祐一訳で解釈が違っている。

間宮訳

(its estimated replacement cost discounted at the percentage rate of its interest)

and

(current supplementary costs to the prospective date of ...)

塩野谷祐一訳

its estimated replacement cost discounted at the percentage rate of

⁴ 例3原文

In the same way the user cost of a ship or factory or machine, when these equipments are in redundant supply, is its estimated replacement cost discounted at the percentage rate of its interest and current supplementary costs to the prospective date of absorption of the redundancy. (Op. cit., p. 71)

its (interest) and (current supplementary) costs to the prospective date of

原文の「形」をみると、間宮訳では cost がなぜ複数形になっているか、説明がつかなくなる。上の原文でもそうだが、current supplementary cost は一貫して単数形で使われているからだ。ここで複数形になっている理由は、interest cost と current supplementary cost を並列しているから考えるのが普通だろう。また、interest になぜ its がついていないのか、説明がつかない。「利率」であれば its rate of interest になるはずだ。さらに、current supplementary cost になぜ冠詞がついていないのかも、説明できない。上の原文でも他の箇所でも定冠詞がついており、ここに定冠詞がついていないのは、その前に its があるから、つまり、この and が its interest cost と its current supplementary cost を結ぶものであるからと考えるのが自然である（もちろん、誤植か間違いという可能性はあるが）。

要するに、以上 2 つの例では塩野谷祐一が正しく、間宮陽介が間違っている可能性が高いといえよう⁵。間宮訳にはこれと同様に、and の解釈が塩野谷祐一訳と違っている箇所がいくつも目につく。たいていは塩野谷祐一が原則を採用し、間宮訳は例外を採用したことによる違いであった。ここではそのうち、原文の「意味」を考えるまでもなく、「形」だけを手掛かりにすることができる例を取り上げた。

解説不可能な訳文

つぎにとりあげるのは、間宮訳では解説が不可能と思われる箇所である。意外なことに、間宮訳にはこうした部分が少なからずあった。典型例を紹介しよう。第一二章のうち、資本市場の性格を論じた有名な部分に、以下の注がついている。

例 4

間宮訳

(1) 投資信託や保険会社は投資ポートフォリオの生む所得の計算だけでなく、その市場における資本評価の計算をも業務とするのがしばしばである。このような業務はふつうは節度を旨とすると考えられているが、後者〔市場における資本評価〕の短期的変動にも度ははずれた注意を払っているようだ。（同上 218 ページ）⁶

塩野谷祐一訳

(1) 投資信託や保険会社がしばしば投資証券からの所得だけでなく、市場における資本評価をも計算する場合のやり方は、通常慎重であると考えられているけれども、後者の短期的変動にあまりにも多くの注意を向ける傾向がある。（同上 156 ページ）

間宮訳のうち、「その市場における資本評価の計算をも業務とする」というのが具体的に何を意味するのか、分かるだろうか。正直なところ、さっぱり分からない。内容は分からないが「資本評価」という仕事があって、それを企業が投資家の依頼を受けて行っているのだろうかとも想像するしかない。

ところが、原文を読むと何ということもないことが書かれているように思えてならない。投資ポートフォリオのインカムだけでなく、時価評価額も算出するのが慎重な姿勢だと考えられているため、短期的なキャピタル・ゲイン（ロス）に注目しすぎる結果になっているというのではないだろうか。この解釈が正しいとすると、塩野谷祐一訳では理解に苦勞し、間宮訳ではまず、解説が不可能だと思える。

それ以上の問題がある。塩野谷祐一訳は原文のほぼ正確な逐語訳になっている。ところが間宮訳では、この原文からこの訳がなぜでてくるのか、理解に苦しむ。たとえば、「このような業務はふつうは節度を旨とすると考えられているが」という訳がどうしてでてくるのか分からない。また、原文の tend to をどう解釈したかが分からない。

以上の例を取り上げたのは、じつはこの注がついている段落の解釈に問題があると思えるからだ。長い段落なので、前半と最後を除いて紹介するが、それでもかなり長い。

例 5

間宮訳

……さらに、目先の市場変動はこれを無視してかかろうとする投資家は、安全を確保するためにそのぶん大きな資力を必要とする。よし投機的取引を大規模に行うことあったとしても、借入金をもってするなど論外である。この点は、投資ゲーム

⁵ なお、塩野谷九十九訳は、例 2 では間宮訳と同じ解釈に、例 3 では塩野谷祐一訳と同じ解釈になっている。この 2 つの箇所でも矛盾があるように思える。そこで塩野谷祐一は例 2 を修正し、間宮は例 3 を修正したのだろう。

⁶ 例 4 原文

1 The practice, usually considered prudent, by which an investment trust or an insurance office frequently calculates not only the income from its investment portfolio but also its capital valuation in the market, may also tend to direct too much attention to short-term fluctuations in the latter. (Op. cit., p. 157)

から得られる、所与の知力と資力に対する収穫が比較的高いことのさらなる理由である。最後にもう一つ。長期的投資家は公益を最も促進する存在であるにもかかわらず、最も非難を受けるのも実を言えば彼であり、投資資金の運用者が〔投資信託などの〕委託者、〔保険会社などの〕資金運用機関、銀行などの場合は決まってそうである(1)。彼は常識はずれで型破り、向こう見ずの存在だというのが世間の通り相場であるが、なるほどこうしたことは彼の行動の本質に属しているからである。(同上 217 ページ) 7

塩野谷祐一訳

……さらに、短期の市場変動を無視しようとする投資家は安全のために多額の資金を必要とし、借入金をもってする場合には、やるにしてもあまり大規模な操作をしてはならないのである——このことは、知力と資力の手持ちを一定とすれば、遊戯から得られる収益の方が高いもう一つの理由である。最後に、實際上最も多くの批判の対象とされているのは、公共の利益を増進させるはずの長期投資家であって、投資資金が委員会や評議員会や銀行によって管理される場合はつねにそうである(1)。なぜなら、普通の意見をもつ人々の眼に、彼が常軌を逸し、型破りで、無謀に映るのは、彼の行動の本質からみて当然だからである。(同上 155 ページ)

証券市場で長期投資よりも投機が中心になると論じた有名な箇所だが、間宮訳を読むと、絶望的なほど分からないという印象をもつ(因みに〔……〕は間宮が挿入した補足であり、ない方が良かったように思える)。塩野谷祐一訳はまだましで、解読不可能というほどではない。そして、原文ははるかに理解しやすい。原文を読んだ後に間宮訳を読むと、いくつもの問題がみえてくる。

まず、「よし投機的取引を大規模に行うことあったとしても」というのはなぜなのか。ここでは投機家ではなく、長期投資家の話をしているのだから、「投機的取引を大規模に行う」ことはないはずだ。原文にも、「投機的取引」と解釈できる語句はない。この「投機的取引」という言葉で、全体の筋が読め

なくなる。

そのため、つぎの「この点は、投資ゲームから得られる、所与の知力と資力に対する収穫が比較的高いことのさらなる理由である」は解読不可能になる。原文を読むと、単純なことが書いてあるようだ。長期投資家は株価が短期的に変動してもポジションを維持するので、借入に頼るわけにはいかない。そのため、レバレッジが使って投資ゲームを行う投機家と比較して、知力と資金力が同じなら、リターンが低くなるといっているのだろう。

もうひとつ、「最後に」以下では、「常識はずれで型破り、向こう見ずの存在」だとされるのは通常、投機家である。だから、この部分でケインズが誰のどういう行動について語っているのかが分からなくなる。投機が一般的な市場では、長期投資家は常識に逆らうことになるといっているだけだと思うのだが。

原文を素直に読めば、間宮はここで原文だけからは読み取れない解釈をくわえて訳文を書いているように思える。だが、この訳文からは、どのような解釈なのかを読み取ることができなかった。間宮の解釈が正しい可能性はもちろんあるわけだが、解読ができないのだから、正しいか正しくないかを判断することはできなかった。

間宮訳は基本的に翻訳調の逐語訳だが、以上 2 つの例にみられるように、ときおり訳文が原文の「表面」から大きく離れていることがある。21 世紀の時代の要請を考えれば、翻訳にあたって、原文の「表面」の奥にある「意味」を理解して、それを母語で表現するスタイルをとるべきだと思うが、間宮がそういうスタイルを採用しようとした形跡はない。ときおり、原文の「表面」を無視するようになるという印象だ。こういうとき、訳文は解読不可能になるか、誤解を招くものになる。

訳語の選択の問題

もうひとつ指摘しておきたいのは、訳語の選択をめぐる問題である。間宮訳は既訳とそれほど違っているわけではなく、違っている点のうちいちばん多いのは訳語である。だから、訳語の選択の問題は間宮訳の評価にあたって大きな要因になる。まずは第一五章の例をとりあげる。

例 6

7 例 5 原文

.... Furthermore, an investor who proposes to ignore near-term market fluctuations needs greater resources for safety and must not operate on so large a scale, if at all, with borrowed money -- a further reason for the higher return from the pastime to a given stock of intelligence and resources. Finally it is the long-term investor, he who most promotes the public interest, who will in practice come in for most criticism, wherever investment funds are managed by committees or boards or banks.[1] For it is in the essence of his behaviour that he should be eccentric, unconventional and rash in the eyes of average opinion. (Op. cit., p. 157)

間宮訳

利率は高度に心理的な現象というより、高度に慣習的な現象と言ったほうが恐らくもっと適切かもしれない。というのは、その現実の値は主に、その値はどのようなものになるかについての広く行き渡っている見解によって支配されるからである。どのような水準の利率であれ、それが永続しそうだとして十分に強い確信をもって受け入れられているならば、現に永続するものである。といってもむしろ、変動する社会では、いろいろな理由から、期待された正常値のまわりを変動するのは避けられない。とりわけ、 M_1 が M 以上に急速に増加しているときには、利率は上昇するだろうし、逆の場合には利率は下落するであろう。しかし利率は、完全雇用には高すぎる慢性的な高水準のまわりを何十年ものあいだ変動することだあってありえよう。ことに、利率は自己調整的で、それゆえ**市場によって打ち立てられた水準は慣習よりもずっと強固で客観的な基礎に根ざしており、最適な雇用水準に達することができないのは利率が不適切な範囲にとどまっていることとは少しも関係がないと、大衆にも当局にも、広く考えられている場合には。(同上 285 ページ)

** この箇所は原文では「慣習 (convention) によって打ち立てられた水準」となっているが、文脈を考えて訳文のように訂正した。(同上 398 ページの訳注)⁸

塩野谷祐一訳

利率は高度に心理的な現象であるよりもむしろ高度に慣習的な現象であるといった方が、おそらくはるかに正確であるかもしれない。なぜなら、その現実の値は、その値がどうなると期待されるかについての一般的な見解によって著しく支配されるからである。どのような水準の利率であっても、長続きしそうだとして十分な確信をもって認められるものは長続きするであろう。もちろん、その利率は、変動する社会においてはさまざまな種類の理由のために、期待される正常水準をめぐる変動にさらされるであろう。ことに、 M_1 が M よ

りも速く増加する場合には、利率は上昇し、逆の場合には逆の結果になるであろう。しかし、利率が、完全雇用を実現するには慢性的にあまりにも高い水準のところ数年も変動することがある。——利率は自動調節的であるという意見が一般的となっていて、そのため慣行によって確立された水準でありながら、慣行よりもはるかに強い客観的な根拠に根ざしていると考えられ、雇用量が最適の水準を達成しえないことは、公衆の意見においても当局の意見においても、不適當な幅の中で利率が成立していることとはまったく関係がないと考えられている場合には、とくにそうである。(同上 201 ページ)

翻訳を一種のフィードバックの過程だと考えたとき、この段落はじつに面白い実例になるのではないかと思う。

翻訳にあたっては、冒頭から 1 センテンスずつ、1 段落ずつ訳していくわけだが、当初の訳はいつてみれば仮の訳である。仮といっても大雑把な訳だとか、荒い訳だとかいうわけではない。はじめから完璧な訳にすることが目標だ。最後まで訳して読みかえすときに、一字一句の修正も必要ではないようにすることを目標にしている。それでも、翻訳が進むとともに、それまで訳した部分を修正する必要がかならずでてくる。

なぜかという、翻訳は原著を深く細かく読んでいく作業だからだ。外国語で書かれた原著を読むとともに、原著者が表現したことを母語で書いていく。原著の理解が曖昧だったり、浅かったりすれば、書くことはできない。だから翻訳にあたってはたぶん、普通の読書と比較して、10 倍は深く細かく読むことになる。理解が曖昧だったこと、浅かったこと、あるいは間違っていたことが分かるのは、それまでの理解では訳せないセンテンスや段落にぶつかったときだ。つまり、翻訳へのフィードバックは誰か他人から与えられるより前に、原文から与えられる。

こうしたフィードバックにはさまざまな水準のものがあるが、この段落はそのうちもっとも簡単な訳語のレベルの好例だといえよう。ここで訳語が問題になるのは convention だ。間宮は『ケインズとハイエク』(ちくま学芸文庫)で、この言葉を中心にケインズ理論の再構築を試みたとしているので、どうい訳語を選択しているのか、興味をもつのは当然だといえる。

間宮は convention を一貫して「慣習」と訳してき

8 例 6 原文

It might be more accurate, perhaps, to say that the rate of interest is a highly conventional, rather than a highly psychological, phenomenon. For its actual value is largely governed by the prevailing view as to what its value is expected to be. Any level of interest which is accepted with sufficient conviction as likely to be durable will be durable; subject, of course, in a changing society to fluctuations for all kinds of reasons round the expected normal. In particular, when M_1 is increasing faster than M , the rate of interest will rise, and vice versa. But it may fluctuate for decades about a level which is chronically too high for full employment; --particularly if it is the prevailing opinion that the rate of interest is self-adjusting, so that the level established by convention is thought to be rooted in objective grounds much stronger than convention, the failure of employment to attain an optimum level being in no way associated, in the minds either of the public or of authority, with the prevalence of an inappropriate range of rates of interest. (Op. cit., p. 203-204)

た⁹。だがこの段落で、この訳語に居心地の悪さを感じたのではないだろうか。いや、居心地の悪さならもっと前に感じていたかもしれない。たとえば間宮訳 211 ページには、「慣習のもつ不安定さ」という訳がある。「慣習」とははるか昔から続いてきていて、簡単に変わったりはしないものだが、conventionは不安定なものなのだ。いってみれば、convention=「慣習」という見方にはかなり前から小さなひびが入っていた。この段落にきて、ひびが大きくなり、大きな割れ目になって、無視できなくなったはずだ。

まず、段落の前半では、convention の形容詞形である conventional の意味が説明されている。この語は prevailing に近い意味をもっているのである（因みに、英語の類語辞典をみると、この 2 つが類語として扱われている）。この点に間宮が気づかなかったとは考えにくい。しかし訳文は、そんなことには気づかなかったかのようにになっている。そのため、訳文だけを読むと、「というのは」以下が理由になっているのかどうか、理解が難しい。

つぎに、段落の後半では、1 つのセンテンスの中に 2 回使われている convention のうち一方を「慣習」とは訳せなくなったようだ。原文からのフィードバックの典型例である。このような場合、訳者はさまざまな可能性を考える。第 1 に「慣習」という訳語が間違っている可能性である。いいかえれば、convention という言葉の意味を誤解していた可能性だ。第 2 に、convention という語がいくつもの意味をもっているために、文脈によって訳し分けなければならない可能性である。通常はこのどちらかを採用するのだが、どちらも無理であれば、第 3 に最後の手段として、原文が間違っていた可能性を考える。

段落の前半で conventional を prevailing という語で説明しており、prevailing と「慣習」とでは意味にかなりのズレがあることを考えれば、普通なら第 1 か第 2 を採用するはずだと思える。そして原文を読みなおせば、is thought to be がカギになって、第 3 を採用する理由がないことが理解できるはずだ。

だが訳と訳注をみると、間宮は第 3 を採用したのではないかと思われる。第 2 であれば、「市場によって」ではなく、たとえば、「市場に広く行き渡っ

ている見解によって」にしたのではないかと思えるからだ。間宮はせつかくのフィードバックを活かせなかったようなのだ。

訳語の選択について、もうひとつ例をあげよう。第一六章冒頭の段落である。

例 7

間宮訳

個人の貯蓄行為は言うならば今日は夕食をとらないと決意することである。だがその貯蓄行為が、いまから一週間後あるいは一年後に夕食をとる、あるいは一足の長靴を購入する、つまりある特定の期日にある特定のものを消費するという決意を随伴するかといえば、そんなことはない。かくして、今日は夕食をとらないという決意は、将来いつの日か行われる消費活動を準備するための事業を促進することなく、今日の夕食を用意する事業を不振に陥れることになる。貯蓄は現在の消費需要を将来の消費需要に振り替えることではない。それはこのような需要を全体として減少させてしまうことなのだ。そのうえ、将来の消費に関する期待は大部分が現在の消費体験をもとにして形成されるから、将来の消費も抑制されることになりかねない。その結果、貯蓄行為は消費財価格を引き下げのみで現存する資本の限界効用には影響を与えないということにはならず、現実には資本の限界効用をも低下させる可能性がある。このような場合には、貯蓄は現在の消費需要とともに現在の投資需要をも減少させることになろう。（同上 294 ページ）¹⁰

塩野谷祐一訳

個人の貯蓄行為は——いわば——今日は夕食をとることをやめようと決意することを意味する。しかし、それは一週間後あるいは一年後に夕食をとるとか、一足の靴を買うとか、特定の日に特定のものを消費するという決意を必要にするものではない。したがって、それは今日の夕食の用意を

¹⁰ 例 7 原文

An act of individual saving means--so to speak--a decision not to have dinner to-day. But it does *not* necessitate a decision to have dinner or to buy a pair of boots a week hence or a year hence or to consume any specified thing at any specified date. Thus it depresses the business of preparing to-day's dinner without stimulating the business of making ready for some future act of consumption. It is not a substitution of future consumption-demand for present consumption-demand,--it is a net diminution of such demand. Moreover, the expectation of future consumption is so largely based on current experience of present consumption that a reduction in the latter is likely to depress the former, with the result that the act of saving will not merely depress the price of consumption-goods and leave the marginal efficiency of existing capital unaffected, but may actually tend to depress the latter also. In this event it may reduce present investment-demand as well as present consumption-demand.(Op. cit., p. 210)

⁹ 塩野谷祐一は「慣行」と訳しているが、塩野谷九十九訳では「惰性」になっている。「惰性」はもちろん、一般的な訳語ではないが、捨てがたい魅力があるように思える。

するという仕事をへらすだけで、将来のなんらかの消費行為を準備するという仕事を刺激するものではない。貯蓄は現在の消費需要の代わりに将来の消費需要を選ぶということではない。——それは現在の消費需要の純粋な減少である。そればかりでなく、将来消費の期待は現在消費の現行の経験に大きく依存しているから、後者の減退は前者をおそらく抑圧するであろう。その結果、貯蓄行為は消費財の価格を押し下げ、現存資本の限界効率を無影響のままに残すというだけでなく、実際にはそれを減少させる傾向をもつであろう。この場合には、貯蓄は現在の消費需要を減退させるとともに、現在の投資需要をも減退させることになる。（同上 208 ページ）

間宮訳の「将来の消費に関する期待は大部分が現在の消費体験をもとにして形成されるから、将来の消費も抑制されることになりかねない」の部分が理解しがたい。なぜ、「現在の消費体験」なのか。原文は *current experience of present consumption* だ。この *experience* という語は繰り返してでくるが、ここ以外の箇所では気づいたかぎりすべて、「経験」と訳されている。これを「実績」「事実」「現実」といった語で訳するのであれば納得できるが、ここだけ「体験」としたのはなぜなのか。この段落は夕食の話からはじまっているので、「現在の消費体験」では、たとえば、夕食がおいしかったかどうかという意味だと読者が誤解することになるのではないだろうか。

そのうえ、「将来の消費も抑制される」というのはおそらく間違いである。原文は *the former* だが、*the former* とは *the expectation of future consumption* を指すと考えるのが常識ではないだろうか。

ここで、塩野谷祐一はおそらく何の迷いもなく「経験」という訳語を選んでる。文脈上、「体験」ではありえないと判断したからだろうが、それだけではないはずだ。塩野谷祐一にとって、*experience* は文脈にかかわらず、「経験」と訳すべき語だったはずだ。そう考える理由は、塩野谷祐一訳の基礎になった塩野谷九十九訳の性格をみればあきらかである。

1936 年に『一般理論』が出版されたとき、古典派経済学を学んできたものにとって、まったく理解しがたいものであったと、サミュエルソンが語っている（篠原三代平・佐藤隆三編集『サミュエルソン経済学体系第 9 巻』勁草書房、211 ページ以下による）。いまでは初心者が明白で陳腐だと考えることも、謎のようだったというのだ。だから、出版後、

1 年から 1 年半にわたって、マサチューセッツ州ケンブリッジにはケインズの理論を理解できた人はひとりもいなかったと断言している（いかにもサミュエルソンらしく、ケインズ自身すら自分の理論を理解していなかったとしている）。

塩野谷九十九が『一般理論』を翻訳したのは、こういう時期だ。後にアメリカのケインズ経済学を代表する学者になる人たちが母語で読んでまったく理解できなかったという本を、日本の経済学者や研究者が外国語で読んで理解できたとは考えにくい。サミュエルソンはケインズの文章が数式に翻訳されるようになって、ようやく理解できるようになったというが、日本の場合には、数式に翻訳する前に、日本語に翻訳する作業があった。それを担ったのが塩野谷九十九だ。

幸い日本には外国の進んだ文化を吸収してきた長い歴史があり、謎のよう理解しがたい理論を吸収するために使う標準的な方法が作られていた。まず、いわゆる翻訳調の逐語訳のスタイルを使って、原文の表面を忠実に訳していく。つぎに、こうして作られた訳書を参考にしながら、原書を 1 センテンスずつ詳しく読み、議論し、意味を考えていく。翻訳調の翻訳はあくまでも、原書を読むための参考資料なのであり、単独で読むものではなかった。そして、翻訳調の訳書には独特の読み方があった。

たとえば、翻訳調の訳書で「経験」という言葉が使われていたとき、この言葉が日本語で普通に使われる「経験」とはまったく違っているというのが常識であった。この常識を知らなければ、そもそも翻訳書を読む資格がないといえるほどだったのだ。では、翻訳調の翻訳で使われる「経験」とはどういう言葉だったのか。原文のこの部分に *experience* と書かれていることを示す符丁だったと考えるといちばん分かりやすい。つまり、「経験」はたとえば、「良い経験だったと考えて、また頑張ります」というときの「経験」とはまったく違って、それ自体には何の意味もない空の言葉、*experience* という言葉の意味を考えるための手掛かりにすぎない符丁だったのである。

ケインズは理論家ではあるが、同時に批評家、ジャーナリストという面ももっていた。『一般理論』にも、そういう特徴がよくでてるように思う。たとえば、第一四章の付論でリカードについて、寸鉄人を刺す名文句を書いている。リカードは現実から

離れた仮想の世界を築き上げ、それが現実の世界であるかのように思わせ、その世界に一貫して住みつけており、これは凡庸な精神では達成できない偉業だというのである。後継者のほとんどは常識が邪魔して、論理的な一貫性を維持できなくなっているともいう。

塩野谷親子の訳にはさまざまな問題があるにしても、少なくとも現実の日本語から離れたところに翻訳調という仮想の世界を築き上げ、首尾一貫した翻訳を仕上げてきたとはいえるだろう。サミュエルソンがいうように、謎としか思えなかったケインズ理論を、いまでは初心者が難なく理解するようになっていたのだとしても、塩野谷九十九の時代に翻訳調の翻訳が必要だったのは確かだと思える。

間宮陽介は、時代の要請がすっかり変わった 21 世紀になって、塩野谷九十九と同じスタイルの翻訳を行おうとした。常識が邪魔して一貫性が保てなくなるのも不思議ではない。その結果、使ってはならない箇所「現在の消費体験」という表現を使う結果になったのではないだろうか。

終わりに

間宮訳を読むと、塩野谷訳に代表される翻訳調の世界がいまだにいかに強い影響力をもっているか、あらためて印象づけられる。例としてあげた部分を読めば分かるように、間宮訳で使われている言葉や表現はほとんど、翻訳調の世界のものである。単語のレベルでいえば、上記の「経験」もそうだし、「利子率」や「期待」といった言葉も、翻訳調の世界のものだ。

たとえば「利子率」という言葉は、経済の現実を考えるときにはまず使わない。「金利」か「利率」を使う。だが翻訳調の世界では、*interest rate* や *rate of interest* は「利子率」と訳すことになっている。このため、経済専門家のなかには、翻訳でなくても金利を「利子率」と表現する人がいる。「利子率」という言葉を誤解する読者はまずいないから、とくに問題があるわけではないという意見もあろうが、現実とはかけはなれた理論の世界の話だという印象を与えるという問題は残る。

だが、「期待」の場合にはさらに、不必要な誤解を招きかねないという問題がある。翻訳調の世界では、「期待」は原文のこの部分に *expectation* という語があったことを示す符丁であって、それ以上の意

味はもたない。普通の日本語で使われる「期待」は「希望的な望み」という意味であって、ある程度まで不合理なものだが、翻訳調の世界で使われる「期待」にはそういう含意はない。英語の *expectation* は誤解の余地があまりない言葉なのだから、日本語でも誤解を招かないように、「予想」とすればいいと思うのだが、翻訳調の世界では「期待」と訳するのが約束ごとになっている。現実の日本語から離れたところに、現実の経済からも離れたところに作り上げられた仮想の世界、それが翻訳調の世界である。

翻訳書のなかでは、「期待」も「経験」も「利子率」も首尾一貫して使われているかぎり、それほど問題はないかもしれない。だが、翻訳書で学んだことを現実に適用しようとすると、すぐに問題が起こってくる。たとえば、数年前のデフレ論争のときに、「インフレ期待」という言葉が使いにくかったことを考えてみればいい。「インフレ期待」とは、普通の日本語なら「インフレが起こればいいなという気持ち」といった意味になるだろうが、専門家の間では *inflation expectations* の訳語として、違った意味で使われる。普通の日本語に翻訳すれば、「予想インフレ率」か「インフレ率の予想」だ。だが、普通の日本語として考えたときの意味だと誤解されることもあり、ときには書き手自身が誤解している場合すらあった。そこで、「インフレ期待」という言葉を使うときに、「予想インフレ率」のことだと解説している例もあった。だったらはじめから「予想インフレ率」といえばいいのと思う。

間宮陽介は京都大学大学院教授という権威ある立場の学者であり、少なくとも一昔前までは絶対の権威だった岩波文庫の 1 冊なのだから、もっと思い切ったスタイルで翻訳することもできたはずである。『一般理論』はケインズ革命といわれるほど伝統を打ち破った本なのだから、翻訳調の伝統を打ち破る翻訳を行ってほしかった。翻訳調の仮想の世界から抜け出して、現実の世界を考える際に使える概念を示してほしかった。少なくとも、古いスタイルの翻訳にしかない文体ではなく、経済書で普通に使われている文体で訳してほしかった。ないものねだりなのだろうか。